

# 凡夫に開かれる仏道

中 川 皓 三 郎

今、紹介にあずかりました中川です。今日は「凡夫に開かれる仏道」と、こういうようなテーマでお話したいと思います。

このようなテーマで考えようとしていますことは、人間の生きる意味というものです。とくにこのことを意識するようになったのは、数年前にある先生の授業の中で、鈴木大拙、曾我量深、金子大栄という三人の先生方の、いよいよ命終わっていかれる時の最期の言葉が、一言で言えば、「ありがとう」というものであることをお聞きしてからです。授業の中ということでありましたが、その時、胸にジーンと来るものがありました。それは人間として生まれ、人間として生きている誰もが、三人の先生方と同じように、生まれてきたことを喜び、たとえ苦勞の多い人生を生きるようになって、喜びと満足の中で命終わっていききたいと、心の奥深くで願っているものであることを、あらためて教えられるということでありました。そして、そのことは同時に、私たちに、人間としてなさなければならぬことがあることを教えています。

仏教は、「仏になる」という言葉で、人間としてなさねばならないことを教えています。そのことは仏陀のことを「真人」と、真(まこと)の人と書くわけですけれども、「真人」と呼ばれますから、真実の人間になる、本当の人

間になることと言つていいように思われます。では、「仏陀になる」とはどのようなものになることなのでしょう。そのことを釈尊の生涯に尋ねることによつて、少し学んでみようと思います。

ご承知のように、釈尊は今から二千五百年ほど前に、インドに釈迦族の王子として生まれました。その時の名をゴータマ・シッタールタといいます。そして『大経』に、

老・病・死を見て、世の非常を悟り、国と財と位とを棄て、山に入りて道を学ぶ。

〔真聖全』一・二二頁〕

とありますように、二十九歳の時、老・病・死の苦しみからの解脱を願つて出家し、六年後の三十五歳の時、ピッパラ樹の下で縁起の法（真理）に目覚めて仏陀になりました。また、それに目覚めることによつて、仏陀になつた縁起の法について、

縁起法なるものは、我が所作に非ず、亦た余人の作にも非ず、然かも彼如来出世するも及び未だ出世せざるも、法界に常住せり。彼の如来は自ら此の法を覚りて、等正覚を成じ、諸の衆生の為に、分別し演説し、開發し顯示す。所謂此れ有るが故に彼れ有り、此れ起るが故に彼れ起り、謂ゆる無明を縁じて行あり、乃至純大苦聚集まり、無明滅するが故に行滅し、乃至純大苦聚滅すと。

〔雜阿含經』阿含部一・二九八頁〕

と語られています。そのことは、「法界に常住せり」とありますように、すべての存在がそれにおいて在る法、真理に目覚めたということです。だから、ゴータマ・シッタールタが縁起の法に目覚めて仏陀になつたということは、

明星出現の時、我大地の有情と共に同時に成道せり。

〔宮本正尊『仏教の根本真理』〕

とも語られ、また『涅槃經』に、

一切の衆生に悉く仏性有り。

とも語られていますように、すべての生きとし生けるものが、その本性において、仏陀という性質を持つものであることが明らかになつたことでもあります。だから先ほどもふれましたように、すべての人間は仏陀になろうとして生

きているのでありますし、仏陀になることによって、この世に人間として生まれてきた意味が完成するのであります。このように人間の生涯を成仏道として見るところに仏教の人間観があるのです。

『スッタニパータ』では、

真理はひとつであつて、第二のものは存在しない。その（真理）を知った人は争うことがない。

とか、

敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者どもの間にあつて心おだやかに、執着する者どもの間にあつて執着しない人、——かれをわれは（バラモン）と呼ぶ。

（中村元『ブッダのことば』）

と語られ、『大経』では、

もろもろの衆生において、視わすこと自己のごとくす。

（『真聖全』一・四頁）

とあり、『法華経』の譬喩品では、

今此の三界は、皆是れ我が有なり。其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり。

（法華部・六〇—一頁）

とも語られていますように、「仏陀になる」ということは辻邦生の言葉を借りて言えば、いかなるものとも対立することのない、〈世界Ⅱ私〉という自己を生きる者になることであります。まあ、この〈世界Ⅱ私〉というのはですね、辻邦生の『詩と永遠』という本の中に出てくる言葉ですけれども、私はその言葉を借りて、「仏陀になる」ということは、世界と私がつつと、そういう自己を生きる者になること、そういうふうと考えております。だから釈尊は、八十歳でクシナーガラの沙羅双樹の下で般涅槃するまで、自らの目覚めた法を、身をもって示し、言葉をもって説くことによつて、

すばらしいことです。ゴータマ（ブッダ）さま。すばらしいことです、ゴータマさま。あたかも倒れた者を起すように、覆われたものを開くように、方角に迷った者に道を示すように、ゴータマさまは種々のしかたで法を明

らかにされました。ですから、わたくしはゴータマさまに帰依したてまつる。また真理と修行僧のつどいに帰依したてまつる。ゴータマさまは、わたくしを在俗信者として受け入れてください。今日以後命の続く限り帰依いたします。

(『ブッダのことは』)

と語るような人々を生み出していきました。そして、それはカーストという言葉で語られている厳しい差別のインドの社会にあつて、僧伽、和合僧と呼ばれる、平等な親しい交わりの場を生み出すことでもあったのです。だから仏陀のいのちを、このような度衆生のはたらき、つまり慈悲行に見ることができると言ってもいいように思います。

そうしますと、このように釈尊の生涯を見ます時、「仏陀になる」ということを三十五歳の時のピッバラ樹下の成正覚で語るのではなく、三十五歳の成正覚から八十歳で般涅槃するまでの歩みとして語ることができないでしょうか。そこにはいろんな問題があると思いますが、私はそういう意味で三十五歳の時に、ピッバラ樹の下で仏陀になられた、その三十五歳から八十歳でクシナーガラで般涅槃していかれる、その釈尊の歩みを成仏道と、まあこういうようなことで考えていきたいと思つていられるわけです。もしそのように考えることができるならば、そのような歩みはいかなるものなのでしょうか。

毎田周一という、暁烏敏先生に師事した方がおられます。その方が『雑阿含無常経』と呼ぶ經典には、

解脱するものは眞実の智生ず。我が生已に尽き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る。

(『雑阿含経』阿含部一・五頁)

ということが語られています。『国訳一切経』ではですね、『無常経』とは出ていないんですけれども、毎田周一先生は、その經典を『無常経』と、こう呼ばれたわけです。そして、毎田先生は『雑阿含無常経讃仰』において、この「我が生已に尽き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る」を、「阿羅漢の内容的、自覚的規定」と言い、「涅槃の内容的規定であり、阿羅漢とは、この涅槃を自証せるものである」と述べています。釈尊がで

すね、自ら覚った法をサルナートで初めて五人の人に説かれます。そして、五人の人が次々と釈尊の教えに教えられて、目覚めていくわけでありませけれども、その時に『仏本行集経』という経典は、「此の世間に、六阿羅漢あり。一はこれ世尊、五はこれ五比丘なり」と、こんな言葉で表現しているんですね。だから釈尊もまた阿羅漢の一人として、そこでは語られているわけですが、今申しましたように、この毎田先生の言葉を受けて、児玉暁洋先生は「生と死」と涅槃と往生」という論文の中で、

「我生已尽」は阿羅漢の内容的自覚の規定であるがそれは同時に真実智の内容である。しかしして真実智とは無明の滅であるから「我生已尽」とは無明の滅を意味するものでなければならぬ。

と述べ、

吾々は已に生も死も尽きたこの人の生を何と名ずけたらよいのであろうか。いう迄もなくこの生も死も尽きた人の生は「涅槃」と呼ばれている。

と述べています。そして、ご存知のように、お釈迦様が初転法輪で説かれた法というのが、四諦の教説として伝えられているわけですが、阿羅漢である釈尊の生涯と、その四諦の教説とを対照して、

一般に「道」即ち八正道は「涅槃への道」と言われている。ところでこの道を釈尊の生涯に於てみようとすると、成正覚から入涅槃に至る間の釈尊こそ正しく道の如実の実践者であると言いうことが出来る。そのように言われること、及び苦・集が有漏にして有為、滅が無漏にして無為であるに於て道が無漏にして有為であると言われることによつても確かめられないであろうか。がしかし同時に道は釈尊の生涯に於ける涅槃「への道」なのである。それ故に吾々は次のように言うことは出来ないであろうか。「道」こそは教説と生涯との涅槃の二重性を統一するものであり、道は法と人との統一として成正覚から入涅槃に至る釈尊の生存の構造それ自体であり、釈尊

が如実に道を行ぜられたということは決して釈尊が個人的に豊かな能力を持せられた為ではなくして釈尊が実に道それ自身で在したことに基づく、と。或は又次のように言うことが出来ないであろうか。成正覚＝涅槃は「永遠の今」としての「瞬間」であり、その瞬間の内容は「有情非情同時成道・草木国土悉皆成仏」と言い現わされているのであり、「道」は西谷教授の言われる「永遠に触れた『永遠の現在』と、刻々に移り変る『時の現在』とが一つである」ような時を生きるものであり、それは「伝道僅か年余にして、マガダ第一の教団となった」と言われる如く、力強い度衆生の活動として真実の社会と歴史とを形成して行つたのである、と。

〔蘭思〕復刊第二号

と語っています。少々長い引用になりましたが、釈尊の成正覚から般涅槃までの歩みは、四諦の教説における道それ自身であり、「いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり」と言われる真理それ自身が釈尊の生涯として現れたということです。だから私たちが「仏陀になる」ということは、このような釈尊と同じ質を持った人生を生きる者になることである、と言つていいわけです。

そして、その道は、

悪魔パービマンが言った、

「子のある者は子について喜び、また牛のある者は牛について喜ぶ。人間の執着するものものは喜びである。執着するものものない人は、実に喜ぶことがない」。

師は答えた、

「子のある者は子について憂い、また牛のある者は牛について憂う。実に人間の憂いは執着するものものである。執着するものものない人は、憂うことがない」。

とか、

子や妻に対する愛着は、たしかに枝の広く茂った竹が互いに相絡むようなものである。筍が他のものにまつわりつくことがないように、犀の角のようにただ独り歩め。

とか、

自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも国をも望んではならぬ。

とか、

家から出て、家の無い生活に入り、楽しみ難いことではあるが、孤独のうちに、喜びを求めよ。

(『ブッダのことは』)

等と説かれていますように、人間の生存を苦に結びつける渴愛 (tanha) を離れるために家から出て、家族を持たない生活を送ることがまず求められました。だから、伝統的には仏陀釈尊を手本として出家の道を進むことであつたわけです。そして、その道は、私たちが確かな菩提心を発して、釈尊の教えに教えられて、龍樹が「まさに身を惜しまず、昼夜精進して、頭燃をはらうがごとくすべし」(『十住毘婆沙論』『真聖全』一・二五三頁)と語っていますように、まじめに努力すれば、誰もが釈尊と同じように仏陀になることができる、人間信頼の中で歩まれてきた道でもあります。

親鸞が九歳で得度を受け、二十九歳で下りることになった比叡山延暦寺も、伝教大師最澄が、『山家学生式』に、  
国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝となす。

(『天台法華宗年分学生式一首』『最澄』日本思想大系4・一九四頁)

と語っていますように、『法華経』の教えによって大乘菩薩道を歩む、まじめな仏者を生み出そうとして建てた学仏道場でありました。そして、その修学の道は、「断惑証理」という言葉が端的にそのことを表していますように、

一切衆生はことごとく仏性あれども、煩惱覆えるがゆえに見ることを得ることあたわずと。

とある、自らの煩惱と闘い、それを滅し尽くして、仏性の開覚を目指す道であります。ですから、とくに積尊の滅後に生きる者にとって、必然的に厳しく困難な道にならざるを得ません。そのことを中国の道緯は、

聖道の一種は今の時証し難し。一には大聖を去ること遙遠なるに由る。二には理深く解微なるに由る。

という言葉で明らかにしています。

よく知っておられることでありますけれども、親鸞はその比叡山にほぼ二十年間学ぶことになったのです。そして、その二十年におよぶ学びを通して、後に『歎異抄』に、

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

と語り、

煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなることあるべからざる

と自ら語っていますように、ごまかしようない形で、永遠に変わることはない、煩惱具足の凡夫の我が身に出会うことになったのであります。それは、永遠に仏になることのできない自分自身に出会ったことです。「やればできる」と自分自身を励まし、努力してきた結果、このような自分に出会うことになってしまったわけです。そのことの絶望的な重さを語るものこそ、親鸞の妻である恵信尼の消息に、

山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給いけるに、

と語られる、聖徳太子建立と伝える六角堂に、後世を祈っての百日の参籠であります。その百日の参籠の持つ意味は、親鸞自身が、また後に「和国の教主聖徳皇」（聖典五〇八頁）と仰ぐ聖徳太子に、煩惱具足の凡夫の身に開かれる仏道を求めての百日の参籠であった、と言っていると思います。そのことを明らかにしているものこそ、この恵信尼の言



業であります。「後世を祈る」という言葉の意味を、どのように了解するかということがひとつありますが、私はそういう意味で、仏になれないというその現実の自分自身にぶつかって、そして、その自分のところに開かれる仏道というものを明らかにしたいと、こういう内容が「後世を祈らせ給いける」という言葉で語られているのではないかと、了解しております。そして、恵信尼の消息に、

九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて、示現にあずからせ給いて候いければ、やがてそのあか月、出でさせ給いて、後世の助からんずる縁にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又、六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに、ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、上人のわたらせ給わんところには、人はいかにも申せ、たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも、世々生々にも迷いければこそありけめ、とまで思いまいらする身なればと、ようように人の申し候いし時も仰せ候いしなり。

(聖典六一六―七頁)

と続けられていますように、参籠の九十五日目に、夢告を受けて、吉水に法然上人を訪ねます。そしてまた百か日、ひたすら法然の教えを聞き続けるのであります。

それはいつの時であったか定かではありませんが、後に『歎異抄』第二条で、関東から問いを持って、それこそ命懸けで親鸞を訪ねてきた同行たちを前にして、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほか  
に別の子細なきなり。

(聖典六一七頁)

と語る回心の体験を持ったのであります。

では、この二十九歳の時に持つことになった、回心の体験とは、どのような体験なのでしょう。ご存知のように

親鸞は、

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。

(聖典五四五頁)

と『一念多念文意』に語っていますように、煩惱具足の凡夫とは、どこまでも自分の思い通りになることを求めて生きている者のことです。煩惱具足の凡夫という言葉はですね、親鸞の、その言葉に従って理解するならば、私はこんなふうに考えています。そして、このように生きる生き方は、死ぬまでなくなるならないと言っています。「臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」と、こうあるわけですから、この世の命終わるまでなくなるならないと、このように親鸞は言っているわけですね。このことが、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。

(「教行信証」「信卷」「聖典」二二五頁)

と明らかにされています。「無始よりこのかた」と、こういう言葉ですね、永遠に変わらないというそのことが教えられていると思うんですね。

だから、あらゆるものを手段にして、自分の思いを満たそうとすることによって、自分自身をも、また身近なものをも傷つけてしまいます。なぜなら、どこにも自分の思い通りになる自分自身も人もいないからです。そのことを端的に表しているのが、釈尊の晩年に起きた、「王舎城の悲劇」という言葉で語られている事件です。そこに語られていますことは、よくご存知のように、親子でも殺し合ってしまうということです。そのことが、『血脈文集』に「凡夫はもとより煩惱具足したるゆえに、わるきものとおもうべし」(聖典五四四頁)とありますように、「悪人」ということです。このことが永遠に仏陀になることができないうことなのですが、それこそ誰とも共に生きることで

きない、その悪人の親鸞に、「ただ南無阿彌陀仏と念仏もうして、阿彌陀仏にたすけられなさい」と、法然は教えるのです。そして、このように教える法然もまた、『和語灯録』に、

善導和尚の『観經の疏』にはく、「一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故」といふ文を見せてのち、われらがごときの無智の身は、ひとへにこの文をあふぎ、もはらこのことはりをたのみて、念念不捨の称名を修して、決定往生の業因にそなふべし。たゞ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀の弘願に順ぜり。「順彼仏願故」の文ふかくたましみにそみ、心にとゞめたる也。

（『真聖全』四・六八〇—一頁）

と語られていますように、中国の善導大師の言葉に出遇い、すでに「私は阿彌陀仏に南無する者です」と、自分自身を名告って生きる念仏の人であったのです。

その法然を、親鸞は、『高僧和讃』で、

源空光明はなたしめ

門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず

豪貴鄙賤もへだてなし

（『聖典四九九頁』）

と、法然が光の人であると讃嘆しています。このことは何を語っているのでしょうか。それは『浄土和讃』弥陀經意で、親鸞が、

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

摂取してすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる

(聖典四八六頁)

と明らかにしていますように、「賢哲愚夫もえらばれず 豪貴鄙賤もへだてなし」と詠う言葉は、まさに「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と教える法然の上に、阿弥陀仏の摂取不捨のはたらきを仰いでいるということを表しているのです。このことが光の人であるという意味です。だから、南無阿弥陀仏と念仏もうして生きる者のところに、「摂取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」と語られる、阿弥陀仏は顕現するのであります。だからまた、この「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という言葉は、法然の言葉であるままに、阿弥陀仏が直接親鸞に、「ただ念仏して、我にたすけられまいらすべし」と命ずる言葉でもあるのです。このようにして、すでに「えらばれず」「へだてなし」と表される、阿弥陀仏の摂取不捨の大悲に目覚めて生きる念仏の人の教える言葉に教えられて、人はまた阿弥陀仏の大悲に目覚めて生きる者になるのです。

そして、阿弥陀仏の大悲に目覚めて生きる者になるということは、

安楽浄土はこの大悲より生ぜるがゆえなればなり。かるがゆえにこの大悲を謂いて浄土の根とす。

(『教行信証』「真仏土巻」聖典三二五頁)

と、親鸞は、真実の浄土を明らかにする「真仏土巻」で、曇鸞の『論註』の言葉を引用して語っていますように、阿弥陀仏の浄土に心開かれて生きる者になることであるのです。このことが回心の体験であります。そしてこのように、念仏の人の教える言葉に教えられて、阿弥陀仏の浄土に心開かれて生きる者になるということは、親鸞が『一念多念文意』で、第十八願、至心信樂の願成就文の「至心回向」という言葉を解説して、

「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。

(聖典五二五頁)

と語り、また、

真実功德ともうすは、名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。

(聖典五四三頁)

と語っていますから、真実に目覚め、無上大涅槃の功德を身に受けて生きる者になるということでもあります。念仏の人に、「念仏しなさい」と教えられて、阿弥陀仏の大悲に目覚めること、それが同時に阿弥陀仏の浄土に心開かれて生きること、こういうことなんですね。煩惱具足の凡夫と言われる、もう自分の思いの中だけで生きている者が、初めてその思いが破れて、真実にふれるという、そういう体験でもあるわけですね。それを親鸞は、「無上大涅槃」という言葉で明らかに語っているわけです。そういう意味で、南無阿弥陀仏と念仏もうして生きる者になることは、真実に目覚め、無上大涅槃の功德を身に受けて生きる者になるということです。

そして、そのことは、親鸞が阿弥陀仏の「不虛作住持功德」を解説する所で、

「能令速満足 功德大宝海」というは、能はよしという、令はせしむという、速はすみやかにとしという、よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信ずる人の、そのみに満足せしむるなり。

(『尊号真像銘文』聖典五・九頁)

と明らかにし、

「功德」ともうすは、名号なり。「大宝海」は、よろずの善根功德みちきわまるを、海にたとえたまう。この功德をよく信ずるひとのこころのうちに、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。

(『念多念文意』聖典五四四頁)

と明らかにしています。

親鸞は「証卷」で端的に五種の功德、妙声功德・主功德・眷属功德・大義門功德・清浄功德をあげます。もう改め

て言うことでもないと思いますけれども、その功德を身に受けることによって、語っていると、こういうふうに言っていると思うんですね。天親菩薩が、二十九種の功德がはたらく世界として明らかにした浄土を、親鸞は五種の功德をもって語っているわけです。だから、「証卷」で端的に五種の功德のはたらく世界として語る、浄土の功德をありありと身に体験することです。

そして、この体験によって私たちのところに開かれてくる人生が、

ひとすじに、具縛の凡愚、屠活の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。

〔唯信鈔文意〕聖典五五二頁

と語られているのです。このことを親鸞は力を込めて語るのです。私は何か親鸞という人がこういう言葉で我々のところに開かれてくる仏道というものを教えて下さっていると、こんなふうに見えるのではないかと思うんですね。そしてここで、「煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり」と、こう言われていますことが、例えば「証卷」には次のように語られています。

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。必ず滅度に至るは、すなわちこれ常樂なり。常樂はすなわちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなわちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなわちこれ無為法身なり。無為法身はすなわちこれ実相なり。実相はすなわちこれ法性なり。法性はすなわちこれ真如なり。真如はすなわちこれ一如なり。

〔教行信証〕「証卷」聖典一八〇頁

「真実の証」ということで、本願を信じ、念仏もうして生きる者のところに、明らかにになる仏道をこういう言葉で教えて下さっています。

それ以外にも、

「昇道無窮極」というは、昇はのぼるといふ。のぼるといふは、無上涅槃にいたる。これを昇といふなり。道は大涅槃道なり。(中略) 眞実信をえたる人は、大願業力のゆえに、自然に浄土の業因たがわずして、かの業力にひかるるゆえにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきわまりなし、とのたまえるなり。

〔尊号眞像銘文〕聖典五一四―一五頁

とか、

「不断煩惱得涅槃」といふは、不断煩惱は、煩惱をたちすてずしてといふ。得涅槃ともうすは、無上大涅槃をさとするをうるとしるべし。

〔同前〕聖典五三二―三三頁

とか、

信をうる人は、ときをへず、日をへだてずして正定聚のくらいにさだまるを即といふなり。横はよこさまといふ。如來の願力なり。他力をもうすなり。超はこえてといふ。生死の大海をやすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらくなり。

〔同前〕聖典五三三頁

とか、

往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毘拔致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。即時入必定とももうすなり。

〔一、念念念文意〕聖典五二六頁

とか、このような言葉で、先ほど見ましたように、煩惱具足の、それこそ仏になることができな、そういう問題を持った者のところにですね、こういう言葉で表される道が開かれるんだと、教えて下さっていると言っているのではないかと思います。

このように親鸞は、念仏の人に開かれる人生を、「煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたる」と語り、「正定聚に

住するがゆえに、かならず滅度にいたる」と語っているのであります。このことを寺川俊昭先生の言葉をお借りして言えば、

この眞実功德の回施が、我執に依止する衆生の「虚妄の生」を破り摧き轉換して、この眞実功德に立脚する新しい生を実現するのである。それが「正定聚のくらいに住する」生にはかならず、当然その正定聚に住する生は眞如一実すなわち無上涅槃の功德に触れた生であり、無上涅槃に向けて開かれた生であり、そして無上涅槃の証得に向かつて歩まれる生である。取りも直さず涅槃無上道の現前である。そしてこれこそが、浄土眞宗と親鸞が呼ぶ自覚道そのものであり、そしてまた如来の往相回向が実現する自覚道の具体相なのである。

（寺川俊昭『親鸞と読む大無量寿経』下・一三三頁）

という言葉で表される、そういう人生であります。このように「煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたる」と語られ、「正定聚に住するがゆえに、かならず滅度にいたる」という言葉で語られる人生が、凡夫に開かれる仏道ということです。伝統的に往生浄土という言葉で語られてきたものです。

だからまた、この凡夫に開かれる仏道は、先ほどもふれましたように、阿弥陀仏の浄土が、これは眷属功德を語る言葉ですけれども、

かの安楽国土は、これ阿弥陀如来正覚浄華の化生するところにあらざることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに。遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷属無量なり。（『教行信証』「証卷」聖典・八二頁）と語られる功德のはたらく世界として体験され、また、そのことを清沢満之先生は、

無限大悲の如来に信憑するものは、皆共に如来の寵児にして、互に兄弟姉妹なり、故に其關係は、相愛相扶の親情（如来回向の仏心即ち大慈悲心を根本源泉とす）に出づべき也。（『清沢満之全集』第八卷・四五五頁）

と語っていますように、「ただ念仏して、阿弥陀仏にたすけられなさい」と、念仏の人に教えられて、阿弥陀仏の大



悲に目覚めることよって、すべての人を兄弟姉妹とする、親しい交わりを生きる者になっていくという、そういう内容を持つ歩みが、さつきから申しておりますように、凡夫に開かれる仏道というような言葉で言える人生なのであります。だから、親鸞は、関東の同行に、

としごろ念仏して往生をねがうしるしには、もとあしかりしわがころをもおもいかえして、ともの同朋にもねんごろのころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにてもそうらわめとこそ、おほえそうらえ。

（『御消息集』聖典五三三頁）

と書き送っているのです。ここにですね、「ともの同朋にもねんごろの」とありますように、この「ねんごろ」という言葉をどういふふうに通むかということでありますけれども、私はある先生から教えられたのですが、「根もからむ」ということで、本当に深い交わりを生きていくことです。身近な者と本当に深く深く交わっていく歩みが、「ともの同朋にもねんごろのころのおわしましあわばこそ」であると。それが「世をいとうしるし」と、つまり、「往生を願うしるし」と言っている内容なのです。

まとまりのない発表になってしまいましたが、これで終わらせていただきます。